

三姓の民は、烏介特勒を推して可汗とし、餘勢を保つに至れり、さて烏介可汗に就きては、舊唐書には南來附漢と記し、新唐書には南保錯子山とせり、今先づ此の間の事情を究むるに、烏介可汗は唐會要に據れば曷薩即ち昭禮可汗の弟にして、胡特勤即ち彰信可汗の叔と記され、通鑑會昌元年二月の條に註附せる後唐獻祖紀年錄〔二八二〕にも、同様の關係を記せり、烏介可汗が十三部によりて立てられたるは會昌元年（八四一年）二月なりしが如く、通鑑の引用せる伐叛記に此の事見え、別に同年八月宰相李德裕が武宗に答へし所にも「回鶻の 噶沒斯（特勤）」等自去年（開成五年）九月至天德、今年二月始立烏介」と曰へるによりても之を證するを得べし、舊書廻紇傳の記事によれば、烏介可汗の擁立せらるゝや、直に唐に來附したりしが如きも、茲に至る迄には尙多くの曲折の存したるものなるが如し、舊唐書李德裕の傳に

開成末廻紇爲黠戛斯所攻、戰敗、部族離散、烏介可汗奉太和公主南來、會昌二年二月、牙於塞上、遣使求助兵糧、收復本國、權借天德軍、以安公主、時天德軍使田牟、請以沙陀・退渾諸部落兵擊之、云云

とあるによれば、烏介可汗の塞上に牙營を置き、助を唐に求めしは、會昌二年二月のことと思はるゝが、然も同書本紀には、又會昌元年八月の條に

烏介可汗遣使告難、言本國爲黠戛斯所攻、故可汗死、今部人推爲可汗、緣本國破散、今奉太和公主南投大國、時烏介至塞上、大首領噶沒斯與赤心宰相相攻、殺赤心、率其部下數千帳、近西域（城之）、天德防禦使田牟以聞、烏介又令其相頡于迦斯上表、借天德城、以安公主、仍請糧儲牛羊供給、詔金吾大將軍王會・宗正少卿李師偃往其牙、宣慰、令放公主入朝、賑粟二萬石